

携帯電話を介した中・高生の人間関係の諸相

—大都市における青少年のメディア・ライフに関する調査より—

○酒井 朗（お茶の水女子大学）○伊藤茂樹（駒澤大学）

大多和直樹（東京大学） 木村文香（お茶の水女子大学大学院・日本学術振興会特別研究員）

1. はじめに

本研究の目的は、電子メディアの急激な発展が青少年の人間関係に及ぼす影響をメディア・ライフという視点から分析・考察するものである。インターネットの発達やパソコン、携帯電話の急速な進歩を受けて、近年、メディア論が活発化している。また、携帯電話による出会い系サイトへのアクセスやそこで知り合ったメール友達との接触が青少年の問題行動を誘発する一因だとの指摘も数多い。だが、こうした議論は、①海外の文献などに依拠した思弁的なもの、②当該のメディア機器の技術的特性からその使用様態を推測し、その影響について考察するもの、③犯罪などに繋がった特異なケースに基づいてその利用の問題性を論述するもの、のいずれかになりがちで、青少年の日常的なメディア使用の実態を実証的に踏まえた議論は少ない。

そこで本研究では、大都市に住む中高生（主として女子生徒）の携帯電話使用にスポットを当て、彼らがそれを日常生活のどのような時間・場面で使用し、それを通じて友人などの他者との間に構築する人間関係の特質をインタビュー調査に基づいて詳細に解明する。なお、本研究プロジェクトでは併せてテレビゲーム利用についても同様の視点から調査を行っているが、この点については別途報告する。

2. メディア・ライフという視点

メディア・ライフとは、単にメディアが用いられている生活の局面だけを対象とするのではなく、「日常生活の中でのメディア使用の把握」という視点を含意したものである。このメディア・ライフを分析する上で、我々は以下の3点に留意した。

第1は各種のメディアが日常においてどのような機能を果たしているのかを予断を交えずに観察することである。めまぐるしい技術進歩の中で、メディア論は、次々に登場する新たなメディア機器の機能を技術論的視点から論じてしまう傾向が強かったが、ここでは当該機器の使用実態を踏まえた考察を心がけた。

第2に、「メディアが規定するライフ」という見方でメディア・ライフを捉えないことである。吉見（1994）が指摘するように、メディアに関する「新しい技術は、最初から新しい社会

を生み出していく運動に内挿されており、社会の関数として形づくられてきた（6頁）」。「重要なのは、メディアと社会の変容との相互作用過程を「現代社会が自己と他者、時間と空間、日常と非日常などの諸関係を再配置していく過程の一部として把握（7頁）」するという視点を採用することである。そこでここでは、携帯電話の使用が、当該の人々が招き寄せつつある自己と他者、時間と空間、日常と非日常の再配置をどう促進していくのか、反対にそうした再配置の過程にある人々が携帯電話をどう利用しようとするのかという観点からの分析を心がけた。

第3は「積層性」という視点である。これも吉見が言うように、「口承から筆記や活字へ、そして電子へというメディア変容のプロセスは、一方が廃棄されて他方へ移るといった二者択一的な過程ではなく、一方に他方が重なっていくという積層的な過程である（吉見1994,77頁）」。「電子メディアが生み出す空間は、我々が日常的に住まう物理的な空間にとって代わるわけではない。「われわれはむしろ、場所的な空間性と、本当は比喩的にしか〈空間〉といえないような電子的な空間性に同時に住まってしまうのであり、社会空間全体も、そのような仕方で二重化ないし多重化されていくのである（78頁）。」そこで、この視点から、携帯電話を利用しながらの日常生活全体がどのように構造化されているのかを丁寧に把握することに留意した。

以上の3つの視点から、以下では現代中高生（とくに女子生徒）が携帯電話を日常的にどのように利用しているのかをインタビュー調査の結果に基づいて報告する。はじめに利用概況を報告した後、友人や彼氏彼女など親密な他者との関係、携帯電話が可能にしたバーチャルな空間で出会う人間関係について分析し、最後に彼らの人間関係にみる全体的な特徴を検討する。

3. 調査方法

本調査では半構造化式のインタビュー調査の方法を採用し、携帯電話の利用状況や意識を、できるだけ大勢の生徒に対し、個別に丁寧に聞き取るように努めた。なお、今回のような生徒の日常的な行動や意識を尋ねる場合、誰がインタビュアーになるのかで回答が大きく異なることが予想される。そこで、本調査のインタビュ

アーにはなるべく女子の学生、院生など、対象者と性別、年齢の近い者を採用し、個別に1対1の対面でのインタビューを実施した。

実施時期 2000年12月、2001年3月、10～12月

調査対象者 首都圏にある2つの中学校（P中学、Q中学）に通う中学1～3年生33名（男子8、女子25）、2つの高校（X高校、Y高校）に通う高校1～3年生45名（男子5、女子40名）、合計78名。X高校は進学希望者が大半を占める進学校、Y高校は職業科高校である。対象者は携帯電話の保有者を選定してもらうことを条件に学校側に依頼した。詳細は当日。

4. 携帯電話の利用概況

しばしば指摘されるように携帯電話は高校入学前後に取得する者が多く、今回の調査でもその傾向が見られた。携帯を所持するようになった経緯は、中学生の場合、親との連絡などを理由に挙げる者が多かったが、高校生では友達を持っているからといった理由が多かった。高校生にとって、携帯電話は仲間意識を確認する上での必須アイテムであることが分かる。

だが、生徒たちは、一端取得した携帯電話を、電話機として利用することはきわめて少ない。調査対象者のうち6割は携帯で電話はほとんどかけない、又はかけても1日一回程度だと回答した。生徒たちが多く用いるのはメールである。

メールだけが多用される理由を分類すると次の4点に整理できる。①料金が安い、②メールは要件だけを伝えられる、③メールだと相手が都合のいい時に見てくれる、④メールの方が話しやすい。このようにメールは単純に安いという理由だけではなく、コミュニケーションの手段としてのメール独自の特性ゆえに多用されていることが分かる。その特性とはメールが本来的に「手紙」であるという特性、すなわち、非対面的な文字でのコミュニケーションという特性に関連している。

マスコミ等でしばしば問題にされるメル友（出会い系サイトなどで知り合った見知らぬメール相手）については、現在いる・過去にいたという者を合わせると全体の3分の1程度に上った。学校段階別にみた場合、有りと答えた者の割合は学校段階で有意差がでるほどではなかった。すなわち、学校段階を問わず、メル友がいると答えた生徒が一定数いるということである。

最後に利用料金に関しては、学校間で差が顕著であった。Y高校の生徒の料金が高く、平均で月額1万円を越えた。なお、Y高校の生徒は7割以上の生徒（17名）が料金を自分で支払っていると回答していたが、X高校で同様の回答をしたのは2割強（5名）にすぎなかった。Y

高校の生徒の場合、多くはアルバイトをしており、それで得た給与で携帯の利用料金を支払っているのである。

5. 友人関係における携帯電話の利用

中高生が携帯でメールを送る相手は多くの場合、友人や交際相手の彼氏彼女などの親しい間柄にある他者である。インタビュー調査によれば、こうした相手とのメールの中身は、以下の6種類に分類することができた。①言いにくいこと、気まずいこと、②悩み事、相談事、③約束したり要件を伝えるなどの事務的な連絡、④その日の出来事、⑤くだらないこと、ギャグ、⑥恋愛について、又は彼氏彼女との会話。

回答の中で多かったのは①であったが、これはメールは相手と会わずにメッセージが伝わるためだと思われる。ただし、彼らのいう「言いにくいこと」とは、相手に対する非難や要求ではない。ある生徒は「励ましの言葉」をその例として挙げており、別の生徒は「うれしかったこととか、素直に『ホントありがとう』とか」ということを挙げた。生徒達の中には、こうした自分の持っているやさしい、素直な気持ちを口頭で伝えることに困難を感じている者がいる。そうした者にとって、メールは自分の気持ちを相手に伝えるための格好のツールなのである。

また、悩みごとや相談事も多かったが、これが多いのは、電話と同様にメールは二者間の閉じたコミュニケーションだという技術的特性によるものと言える。ただし、多くの生徒たちには、電話は要件だけで済ますことはできず「どんだん話が膨らんでいく」という懸念があり、反対にメールは、単刀直入に相談内容だけを伝達できる、と考えられている。

親しい間柄のコミュニケーションのもう1つの特徴は「使い分け」である。携帯電話を通じてコミュニケーションを頻繁に図っている彼らは、さまざまにその使用の様態を変化させ、相手や場面により巧みに使い分けている。生徒達は「くだらないこと」と彼らが形容する日常的な出来事をメールで伝えたり、ギャグを送りあったりする一方で、悩みごと、相談事を持ちかけている。ただし、彼らの発言をよく聞いてみると、同じ相手に多様な話題を振るのではなく、むしろ相手によって話題を変えることが多い。

また、先にも指摘したように、生徒達は、携帯電話を電話機として用いるか、メール送信機として利用するかもかなり意識的に使い分けている。電話機は、基本的におしゃべりの道具であり、メールはいいたいこと、要件を簡潔に伝えるのに適していると考えられている。

6. n×n型メディアとしての携帯、メール

(1) 「n×n型メディア」と「メル友」

次に女子生徒たちが携帯電話とメールを介して展開する交友関係の中で、常に連絡を取り合う親しい友人以外の相手との関係を見てみよう。

「n×n型メディア」（宮台1997）と呼ばれる携帯電話やメール、インターネット等は、個人と個人を隔てる物理的、社会的距離を事実上無効化し、不特定多数の人と直接つながる可能性を開いた。同時に、従来なら出会うはずのなかった他者と出会うことで、性犯罪、殺人、違法薬物の売買、「援助交際」など、様々な危険や逸脱につながる可能性も増す。これらの被害者となる危険が指摘されてきた女子生徒たちは、実際、どの程度こうしたコミュニケーションにアクセスし、人間関係を築いているのだろうか。

これについて、いわゆる「メル友」について質問した。ここでメル友とは、メールだけの友人と、メールから始まって後に会うようになった友人を指す。この意味でのメル友は、5節で報告したように対象者の約3分の1に経験があり、かなり一般的なものになっているが、その人数はせいぜい数人に過ぎない。メールのやりとりはあくまで身近な友人とが中心であり、メル友は周辺的である。頻度も、1日に1回程度から、時々思い出したように、という具合に低い。また3分の1というのはこれまでの経験率であり、現在メル友がいたり、メル友から始まった友人との交友が続いている者はこれより少ない。一度はやってみるものの、深入りしたり長続きすることにはあまりなっていないのである。ただし、メル友や「出会い系サイト」などを通じて積極的に交友を広げる者もいることは確かだ。「そのようなことをしている友人がいる」と答えた者は少なくない。しかしこうした友人に対する見方は概して否定的で、その理由は「怖い」「気味が悪い」ということに集約される。漠然とした不安や嫌悪感に加えて、メディアで報じられるような危ない目にあった経験を直接聞いている者もあり、だから自分は近寄らない、というのが大方の態度である。

(2) バーチャル空間と「地元」～顔の見えない／見えるネットワーク

しかし彼女らは、交友を広げることに関心がないわけではない。実際、携帯のメモリに登録されている人数は数十人から100人以上にのぼり、交友範囲は狭くない。すべてが友人とは言えないにしても、いつでも手軽に連絡をとれる相手がそれだけいるのである。

こうして交友を広げていくのは主として異性の友人であり、メル友にしても、いる／いた場合の多くは異性である。彼女らは、新たな出会

いや恋人の候補を求めている。しかし大部分の女子生徒はそれをバーチャル空間で求めることには消極的で、その代わりに彼女らが頼るのは、友人の紹介や「地元」のつながりである。メル友も、全く未知の相手だと不安だが、友人の紹介ならたとえ会ったことがなくても安心できると言うし、「地元」の中学時代の友人やその友人、先輩などのネットワークは、異性の友人を求める際の重要なソースである。

ここには、バーチャル空間とは対照的な「安心」がある。従来「地元」のネットワークとのつながりは、高校が生活や交友の中心になると、疎遠になったり切れてしまいがちだった。しかし携帯やメールは、そうして頻繁に会わなくなった友人とも、互いにコストや負担をかけずに接触を保つことを容易にした。

親密な少数の友人との交友と、バーチャル空間で交友を広げることは、どちらも携帯やメールが容易にした。今回の対象者は前者の志向性が強く、後者については消極的である。彼女らはむしろ伝統的な「顔の見える」地域のつながりを大事にし、そのために携帯やメールを活用している。しかし一方には、これらメディアを介してより広い世界へと交友を広げることを志向する者もいるはずである。こうして新旧の交友のあり方が並存しており、その双方に携帯やメール、インターネット等のメディアが重要な役割を果たしている。

7. 選択される関係性と自己

携帯のメモリに登録されている数十～数百人の友人との関係性は様々である。これらの関係性は、携帯やメールによってどのように配置され、構造化されているのだろうか。その際のキーワードは「選択」である。彼女らは携帯やメールを通じて、関係をとる相手や関係の質をフレキシブルに選択している。

数多くの友人の中心には常時連絡を取り合う数人（及び彼氏）がいる。そこからいわば同心円状に友人が配列され、外縁部にはとりあえずアドレスや番号を交換し合っただけの知り合いが多数いる。こうした同心円状の構造は交友関係一般に見られるが、携帯やメールは友人それぞれとの関係のあり方（親密さや距離）の選択や設定を容易にする。メールの頻度、返信する早さや量、電話に出るか出ないかといったことはすべて選択でき、これらは相手をどのような友人と見なし、どの程度の親密さや距離を求めているかを示すメタメッセージとなる。また、望まない関係に対しては関係を切断ないしリセットするという選択も、着信拒否やアドレスの変更などによって、直接言葉にすることなく可能

である。

携帯やメールを通じた交友関係において選択されるのは、親密さや距離だけではない。上述の「同心円」では、中心に近い友人ほど連絡が密で何でも話し合い、外に行くほど距離が遠くなると想定される。しかし、交友関係の構造はこのように一元的ではない。連絡は密でなく、互いに知っていることは少なくても、ある側面では親密、といった友人もいる。つまり、深い友人から浅い友人へと一元的に配列されるのではなく、それぞれの友人に対して、ある面では深いつき合い、ある面では浅いつき合い、と関係性を選択しており、さらにそこで提示する自己も選択するのである（浅野1999）。こうした関係の取り方も、携帯やメールなどのメディアの特性によって、より容易になってきた（辻1999）。

これは例えば、携帯やメールでの「相談事」の内容と相手にあらわれる。メル友やさほど頻繁に会わない友人は、時に相談相手として重要で、親密な友人とは違った意味を持つ。親密な友人に対して開示するものは確かに多いが、事柄によっては相談しにくいこともある。そうした友人は自分をよく知っているが、既に関係性が固定し、ひとつの枠で自分を見ていたりする。それよりも、自分や自分の周囲についてあまり知らないメル友や、さほどつき合いの深くない友人の方が相談相手として適している場合がある。ここでは、一面的だが浅くはない、という独特な関係性が生じている。

相談事はひとつの例だが、親密さや自己開示の程度が一元的でなくなると、それぞれの関係において提示される自己も単一ではなくなる。自己そのものも選択されるのである。メル友やネット上では、その場その場で異なった自己を提示することが可能である。性別を偽るといった「ウソ」よりも、それぞれが決してウソではない多様な自己を場面場面で提示するのである。そしてこのような自己提示のあり方は、バーチャルではない交友関係においても、メールなどを通じて浸透し始めている。様々に提示される自己は、統一されたアイデンティティよりも軽やかで操作可能な「キャラ」なのである。

8. まとめ

携帯電話を介在させた中高生の人間関係を、メディア・ライフの視点から丹念に追っていった結果浮かび上がったのは、7で指摘されているような関係性や自己の選択である。また、5で指摘したようにその選択に応じて、携帯自身も機能が使い分けられ、メール送信機として機能したり、電話機として機能したりする。

これらの知見は、電話（イエデン）に関する

従来の知見と対比させると興味深い。電話に関して指摘されてきたのは、1つは距離の無化であった（吉見ほか1992）。しかし、携帯電話の普及により中高生が獲得したのは、むしろ距離の選択可能性である。彼らには会って話す、電話で話す、メールで伝えるという3つのコミュニケーション様式を使い分ける選択肢が与えられた。興味深いのは、そうした多様な選択肢の出現によって、彼ら自身がそれぞれのコミュニケーションの特徴を差異化させて認識することになることである。携帯を電話機としての利用するのを嫌がる彼らは、電話が要件だけではすまないことをしばしば指摘し、それとの対比でメールのメリットを指摘した。新たなメディア機器の導入により、こうしてコミュニケーションへのセンシティブリティが先鋭化し、より慎重に対応すべきこととして彼らに認知される。

このことは自己提示の選択という点にもあてはまる。携帯電話が導入された結果、自己提示のあり方の選択肢はこれまで以上に広がったが、そのことが反対に自己の提示ということをそれまで以上に人々に意識させることとなったのだと思われる。親しい友人だけをとつても、どのような話題を振るべき相手かが慎重に検討され、相手により明確に話題が選択されている。

若者集団については、宮台が島宇宙化と称して特定の小さな集団に分断していく様を描いた（宮台1994）。だが、本研究の分析から浮かび上がる若者像と比べると、宮台の描いた若者像にはコアとなる自己のアイデンティティが前提として過度に強調されているように思われる。反対に携帯を利用する現代の中高生たちにとって自己とは7で言うような意味での「キャラ」であり、相手や場に応じてコミュニケーションの内容も様式も変えていくものと想像される。

ただし、冒頭で述べたように、こうした認識や自己の変容は、メディア機器が一方的に規定していると考えるべきではないだろう。現代社会（の若者）におけるコミュニケーションへの高い関心が前提としてあり、その中に、コミュニケーション様式の選択幅をより広げるような技術が導入されたのだと捉えた方がいい。

(1~5,8: 酒井, 6,7: 伊藤)

〈参考文献〉

- 浅野智彦「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』, 恒星社厚生閣, 1999。
 宮台真司『制服少女たちの選択』, 講談社, 1994。
 宮台真司『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』, 朝日新聞社, 1997。
 辻大介「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版, 1999。
 吉見俊哉ほか『メディアとしての電話』弘文堂, 1992。
 吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』新曜社, 1994。